



FSP

2022年度春季一般教育演習（フレッシュマンセミナー） グローバル・キャリア・デザイン2

第32回
ファースト・ステップ・プログラムアジア
全体報告書

目次

はじめに

ファースト・ステップ・プログラム (FSP)-----	P. 4
第32回FSPアジアの概要-----	P. 4
研修日程-----	P. 5
受講者紹介-----	P. 6
Teaching Assistant・先輩生ボランティアの皆様-----	P. 9
担当教職員一覧-----	P. 10

事前活動

事前授業-----	P. 12
グループ活動-----	P. 15
各交流会・学習会-----	P. 18
チームリーダーズ-----	P. 20

現地研修

シンガポール

北海道大学校友会エルム・シンガポールエルム会懇談-----	P. 22
教育機関	
Singapore Management University-----	P. 23
Ngee Ann Polytechnic-----	P. 25
企業・機関	
Institute of Molecular and Cell Biology・Xenolis Pte. Ltd.-----	P. 27
自主研修	
シンガポール-----	P. 29

マレーシア

教育機関	
Management and Science University-----	P. 32
Universiti Sains Malaysia-----	P. 34
企業・機関	
大日本印刷会社—DNP Imagingcomm Asia Sdn. Bhd.-----	P. 36
世界銀行マレーシア事務所-----	P. 38
自主研修	
クアラルンプール-----	P. 40
ペナン-----	P. 41

事後活動

事後授業・成果報告会-----P. 43

参加者の声-----P. 45

終わりに

謝辞-----P. 49

編集後記-----P. 50



はじめに

ファースト・ステップ・プログラム（FSP）とは？

第 32 回 FSP アジアの概要

研修日程

受講者紹介

Teaching Assistant・先輩生ボランティアの皆様紹介

担当教職員一覧

ファースト・ステップ・プログラム (FSP)

グローバル・キャリア・デザイン (通称：ファースト・ステップ・プログラム) は、春休みまたは夏休みに実施される、2週間程度の海外研修プログラムです。海外協定校等の教育機関での授業体験や学生交流、グローバルに事業を展開する企業や法人、国際機関等の海外拠点での実務家の講義、グローバルに活躍する社会人との対話、および関連プロジェクトや施設の視察を行います。参加者は1プログラムにつき20名前後です。プログラム参加を通して、学生の皆さんがグローバルなキャリアについて視野を広げ、自身のキャリア形成に活かすこと、そして、将来的に、「グローバル」でも「日本」でも、自身のキャリアを活かすことができる「グローバル」な人材として育っていくことを目指します。(HP『北大生のための留学ガイド』より抜粋, https://www.oia.hokudai.ac.jp/be_global/)

第32回 FSP アジアの概要

- (1) 参加人数：24名
- (2) 実施期間：2023年2月25日(土)～3月9日(木)
- (3) 研修先国：シンガポール・マレーシア
- (4) 費用：約22万円/1人
- (5) 奨学金：北海道大学・ニトリ海外留学奨学金 (希望者のみ)
受給金額：5万円/1人
- (6) 大学負担費用：車両借り上げ費用など約100万円

研修日程

日付	都市	活動内容	訪問先 ※敬称略・ ()内は略称
2/25(土)	新千歳、羽田、シンガポール	移動	
2/26(日)	シンガポール	懇談、 自主学習	・北海道大学校友会エルム シンガポールエルム会 (シンガポール校友会)
2/27(月)	シンガポール	大学訪問	・Singapore Management University(SMU)
2/28(火)	シンガポール	企業・ 大学訪問	・Institute of Molecular and Cell Biology(IMCB) ・Xenolis Pte. Ltd.(Xenolis) ・Ngee Ann Polytechnic(NP)
3/1(水)	シンガポール、 ジョホール	企業訪問	・大日本印刷会社-DNP Imagingcomm Asia Sdn. Bhd.(DNP)
3/2(木)	ジョホール、 クアラルンプール	移動	
3/3(金)	クアラルンプール	大学訪問	・Management and Science University (MSU)
3/4(土)	クアラルンプール	自主学習	
3/5(日)	クアラルンプール、 ペナン	自主学習	
3/6(月)	ペナン	大学訪問	・Universiti Sains Malaysia(USM)
3/7(火)	ペナン、 クアラルンプール	機関訪問	・世界銀行マレーシア事務所 (世界銀行)
3/8(水)	クアラルンプール	成果報告会	
3/9(木)	成田、羽田、新千歳	移動	

受講者紹介

※所属・学年は2023年3月現在

※(リ)はチームリーダー、(サブ)はチームサブリーダー、
(グ)はグループのリーダーを表す。所属、学年は参加時のもの。

※グループ活動についてはP.15~17

チームリーダー・チームサブリーダーについてはP.20参照

グループ1：各教育機関での英語によるプレゼンテーション担当

 <p>総合教育部1年 (グ)松榮 和也</p>	 <p>法学部2年 (リ)櫻庭 洋史</p>	 <p>工学部3年 市原 碧音</p>	 <p>総合教育部1年 根本 結衣</p>
---	---	---	--

グループ2：全体学習会の企画・運営

 <p>総合教育部1年 (グ)須藤 ひなた</p>	 <p>総合教育部1年 飯田 旭香</p>	 <p>総合教育部1年 北村 栄大</p>
 <p>農学部2年 鈴木 綾真</p>	 <p>工学部2年 山口 慈永</p>	

グループ3：部屋割り表の作成や振り返り・成果報告の会の企画・運営

 <p>工学部2年 (グ) 鉄井 くるみ</p>	 <p>総合教育部1年 (サブ) 千葉 史奈</p>	 <p>総合教育部1年 池内 珠実</p>
 <p>総合教育部1年 滝口 凜々子</p>	 <p>総合教育部1年 古谷 直人</p>	

グループ4：受講生リストの作成や受講生交流会の企画・運営

 <p>農学部2年 (グ) 名和 桃子</p>	 <p>歯学部2年 (サブ) 井手 俊希</p>	 <p>総合教育部1年 佐々木 有那</p>
 <p>総合教育部1年 田中 茜里</p>	 <p>総合教育部1年 西本 桃花</p>	

グループ5：先輩生との交流会の企画・運営や成果報告書の取りまとめ



総合教育部1年
(グ) 中出 祥太



工学部2年
安倍 直哉



総合教育部1年
伊藤 愛沙子



総合教育部1年
岩佐 凜佳



総合教育部1年
小柏 雛音

(文責：西本)

Teaching Assistant・先輩生ボランティアの皆様

私たちが活動を円滑に進めるための多角的なサポートをしてくださった、先輩FSP生であるTeaching Assistant（以下、TAと表記）とボランティアの皆様を紹介します。

※所属・学年は2023年3月現在

※記載内容は

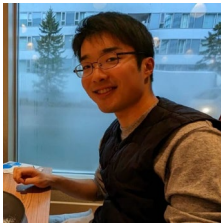
- ・担当・氏名
- ・所属・学年
- ・FSP生として参加した際の回と地域
- ・32回FSPで関わっていただいたグループ



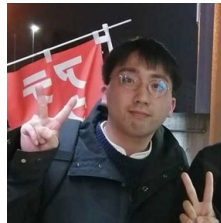
TA
逢坂 はるの さん
・理学院修士2年
・第24回FSP欧州



ボランティア
今井 ゆき菜 さん
・生命科学院修士2年
・第19回FSPアジア
・グループ1担当



ボランティア
中駄 勇太 さん
・医学部6年
・第23回FSPアジア
・グループ3
リーダーズ担当



ボランティア
酒井 聡史 さん
・総合化学院修士2年
・第23回FSPアジア
・グループ4担当



ボランティア
角田 亮平 さん
・工学部4年
・第26回FSPアジア
・グループ2
グループ4担当



ボランティア
最知 俊介 さん
・法学部4年
・第26回FSPアジア
・グループ5担当



ボランティア
松田 涼花 さん
・経済学部3年
・第28回FSPオンライン
・グループ4
グループ5担当



ボランティア
廣瀬 健 さん
・理学部3年
・第28回FSPオンライン
・グループ1
グループ3担当



ボランティア
齋藤 梨乃 さん
・医学部3年
・第29回FSPオンライン
・グループ3
リーダーズ担当



ボランティア
伊丹 萌華 さん
・総合教育部1年
・第31回FSPオンライン
・グループ1
グループ5担当



ボランティア
大瀬 唯華 さん
・総合教育部1年
・第31回FSPオンライン
・グループ5
リーダーズ担当

担当教職員一覧

※2023年3月現在

科目責任教員 北海道大学 高等教育推進機構 国際教育研究部
国際産学協働教育ユニット 講師
川端 千鶴 先生
科目担当教員 北海道大学 参与・客員教授
井上 修平 先生
運営スタッフ 北海道大学 学務部国際交流課
綿世 さん・木下 さん・劉 さん
(文責：中出)



事前活動

事前授業

グループ活動各

交流会・学習会

チームリーダーズ

事前授業

事前授業は、渡航前の12月下旬から2月上旬にかけて計4回、対面で行われました。先生方からは海外研修中の安全管理からキャリア形成に至るまでさまざまなことを教えていただき、現地での研修はより充実したものとなりました。

第1回

日時：2022年12月21日(水) 6講時 (18:15～19:45)

場所：北海道大学 学生交流ステーション 219室

概要:担当者紹介・自己紹介・FSPの概要・受講マナー・今後の日程・グループ決め

初回授業では、まず科目責任教員である川端千鶴先生、科目担当教員である井上修平先生の紹介が行われました。次に、第32回FSP生（以下、FSP生と表記）の自己紹介を行いました。一人ひとりの自己紹介に多くの時間を割くことで、初対面の人が多い中でも、お互いを知ることにつながったと思います。

また、FSPで到達すべき目標や授業の概要、今後の日程や課題について確認しました。さらに、オンライン授業での決まりやマナー、メールの書き方などを学びました。特にメールの書き方については、署名や挨拶などのマナーについてこれから改善していく必要性を強く感じました。

そして授業の最後には、第32回FSPのリーダーとサブリーダーに加え、活動分担のためのグループ分けをしました。グループを決定するまでには少し時間を要したものの、初回授業から協力して決めることができました。



【第1回事前授業 自己紹介の様子】

第2回

日時：2023年1月17日(火) 6講時 (18:15～19:45)

場所：北海道大学 学生交流ステーション 219室

概要：キャリアプランニング・事前調査の方法

第2回事前授業ではキャリアプランニングを中心として進みました。ここでは、克蘭ボルト博士が提唱した「計画された偶発性」という理論が登場しました。計画された偶発性とは、「個人のキャリアは偶然に起こる予期せぬ出来事によって決まる」という考え方で、キャリアプランニングを学ぶ機会がなかった私たちにとって、この理論と出会ったことはとても新鮮でした。

次に、研修先の事前調査の方法について学びました。企業のホームページだけでなく、統合報告書や有価証券報告書なども参照することでさまざまな情報が得られるということ学びました。最後には、事前準備によって、研修先でより深く学ぶことができるというお話がありました。第2回事前授業を通して、事前準備の重要性を改めて認識しました。

第3回

日時：2023年1月25日(水) 6講時 (18:15～19:45)

場所：北海道大学 学生交流ステーション 219室

概要：安全管理・危機管理・新型コロナウイルスの対策・訪問国の特徴と衛生・防犯対策

まず、私たちは北海道大学の同窓生が制作した動画から、海外における安全管理・危機管理を学びました。留学は、渡航することだけが目的ではなく、留学後さらに活躍するための足掛かりであるとの説明がなされました。そのため、無事に帰ることが大切であり、そのためには自分で自分の身を守らなくてはならないと語られていました。次に井上先生より、シンガポールとマレーシアでの新型コロナウイルスへの対応や食あたり、交通事故、盗難への対策などを学びました。さらに、体調管理として渡航前から毎朝の検温を習慣にすることや、海外研修時には自主抗原検査を1週間に一回することなども周知されました。そして、日本に帰国する際に必要なVisit Japan Webやシンガポール入国に必要なSG Arrival Card、マレーシアで提示が求められることのあるMy Sejahteraなどの各種手続きについても学びました。

第4回

日時：2023年2月1日(水)6講時（18:15～19:45）

場所：北海道大学 学生交流ステーション 219室

概要：先生方のキャリア形成・全体学習会のアナウンス・リーダーズによる目標表明・グループ1によるプレゼンテーション

今までの事前授業では、第1回事前授業で決定したグループごとに着席していましたが、第4回事前授業では、異なるグループの人との交流を図るため席順を自由にするようになりました。その結果、今まで話したことがないFSP生同士で話す様子が多くみられ、以前よりもグループを超えた活動が盛んになりました。

まず授業では、川端先生と井上先生のこれまでのキャリアについて伺いました。お話を伺う中で、グローバルなキャリアへの具体的なイメージをつかむことができました。また、計画された偶発性など第2回事前授業でのキャリアプランニングと通じる所も多くあり、学びが深まったように思います。さらに、御講話をしてくださる方だけではなく、キャリアモデルは身近に溢れているというお話もあり強く印象に残りました。次に、2月8日(水)に行われる全体学習会の発表方法やタイムテーブル等に関して、全体学習会の担当であるグループ2からアナウンスがありました。

また、最後の事前授業ということから、リーダーとサブリーダーが、私たちの海外研修期間での目標を表明しました。主に海外研修中に気にかけてほしいこととして「社会性、探究心、柔軟性」の3点が3人より全員に共有されました。具体的な内容としては、社会性を身につけるために主体性を持って一つひとつの行動に責任を持ってほしいこと、貴重な機会である海外研修期間で多くのことを学ぶためにメンバー間で興味・関心を共有し更なる学びにつなげてほしいこと、何事にも柔軟に対応できる力を身につけるためにチーム全員での交流を意識し意見を共有できるような関係を作ってほしいことが発表されました。

最後にグループ1から、海外研修中に各大学で発表する「Attractiveness of Hokkaido University（北海道大学の魅力）」を題とするプレゼンテーションが行われました。授業終了後には、先生や先輩生ボランティアの皆様、そしてFSP生からプレゼンテーションのフィードバックが行われました。特に先生や先輩生からは、伝えたいことに合わせた写真の選び方についてご指摘がありました。これは、グループ1だけではなくFSP生全員にとって学びとなることでした。



【第4回事前授業 全体学習会のアナウンス】

(文責：岩佐)

グループ活動の紹介

私たちは、5つのグループに分かれて、事前調査、企画の準備、プレゼンなどさまざまな活動を行いました。ここでは、各々の中心となる活動の概要とメンバー、各グループの振り返りを紹介いたします。メンバーにおける（グ）は、そのグループのリーダーを表します。

グループ1

活動概要：各教育機関での英語によるプレゼンテーション・事前調査・報告書執筆

メンバー：（グ）松榮・市原・櫻庭・根本

グループ1・根本より：

私たちは、訪問する各教育機関でのプレゼンテーションを担当しました。しかし、メンバー全員の予定が合わず、コミュニケーションが不足していました。そのため、初めに作ったプレゼンテーションは、個人で作ったものを寄せ集めただけとなり、チームとしての成果物とは言い難いものでした。しかし、先輩方からの助言や先生との対話を通して、「コミュニケーション不足」という課題を明確に捉え、解決に向けて対面での集まりの場を積極的に設けるなどの具体的な行動を起こしていきました。その結果、グループ1はチームとして協力し合い、他のFSP生の協力も得ながら、チームの成果物としてのプレゼンテーションを作り上げることができました。一方で、プレゼンテーションの英語に間違いがあったにも関わらずFSP生の中で誰ひとり指摘できず、川端先生から事後授業でご教示いただいた際に初めて気付くという場面がありました。そのためFSP生の間での共有やグループ1のメンバー同士での確認が足りなかった点は、今後の反省点として残りました。

グループ2

活動概要：全体学習会企画／運営・事前調査・報告書執筆

メンバー：（グ）須藤・飯田・北村・鈴木・山口

グループ2・飯田より：

活動開始当初はメンバー全員の予定が合わず、なかなか対面で集まれなかったため、コミュニケーションが不足していました。しかし、グループ活動に対する気持ちを伝え合うことで、メンバー全員のグループ活動への意識が高まりました。特に、お互いをあだ名で呼びあうようにしたことが、メンバー間で打ち解け合うことができたきっかけとなりました。加えて、全体学習会に向けてミーティングを重ねたことで、メンバーそれぞれが活躍するような全体学習会を作り上げることができました。しかし全体学習会を終えると、意識の低下が見られました。そこで、一番の課題であった「当事者意識とは何か」を議論したことや、2月23日（金）に私たちと川端先生で対話を行ったことで、FSPに参加する当事者としての自覚が芽生え、再び意識が高まりました。

グループ3

活動概要：成果報告会企画／運営 部屋割表作成・事前調査・報告書執筆

メンバー：（グ）鉄井・池内・滝口・千葉・古谷

グループ3・鉄井より：

私たちは、事前授業後に夕食を食べに行くことやミーティングを学内で行うことなど、積極的に対面で会う機会を設けたことで、オンラインではしづらい雑談などができ、序盤から仲を深めることができました。しかし、その場の雰囲気を感じてお互いに対立意見を言うことを避けるなど、コミュニケーションの取り方における課題は残っていました。そこで転機となったのが、川端先生との対話です。対話の場でメンバーの本音を一度共有したことでメンバーへの理解が深まり、各々が率先して発言するようになりました。スケジュールや気づいたこと、感情の共有をすることが多くなり、ミーティングなどで意思決定をする速度が速くなりました。またその影響から、グループ内での自分の役割についてはっきり決めたことがなかったものの、メンバーそれぞれが自然と理解し、得意なことを活かせるようになりました。しかし、活動の終盤になっても課題が残っていました。具体的には、その場の空気を気にしてZoomのカメラをオンにしようと提案しづらいがありました。つまり、グループ活動について達成できた部分、できなかった部分の両方が残る結果となりました。

グループ4

活動概要：教育機関での学生交流時のファシリテーター・

受講生交流会企画／運営・受講生リスト作成・事前調査・報告書作成

メンバー：（グ）名和・井手・佐々木・田中・西本

グループ4・佐々木より：

私たちは、全体を通してどの課題に対してもスケジュール管理や進捗確認、議事録作成をしっかりと行い、計画的かつ積極的に進めることができました。ミーティングなどへの出席率も高く、グループ全員で話し合いをしながら作業に取り組むことができました。また、グループ内で事前準備を入念に行っていたことは、企業訪問や大学訪問の際の積極的に質問をすることに繋がりました。しかし、先輩生や先生との対話、グループ内での振り返りを通して、グループワークに関する学びも数多くありました。例えば、効率的に作業を進めるために役割分担を行いました。私たちが一人ひとりの当事者意識の低さから、自分の担当以外に関心を向けられず、グループで共通認識を持ってないまま個人で作業してしまう場面がありました。グループワークに関する学びを得たことで、グループに対して当事者意識を持ち、こまめに情報や考えを共有して、個人の役割であるかどうかにかかわらず積極的に取り組む姿勢が身に付きました。以上のようにグループ4は海外研修前に多くの失敗を経験し、手段と意識の修正を重ね、グループ内の共有方法や活動に統一感を持たせることができました。このことは、海外研修中の確実な情報共有、そして計画していた役割を果たすことに繋がりました。

グループ5

活動概要：先輩生との交流会企画／運営・事前調査・報告書執筆・編集

メンバー：（グ）中出・安倍・伊藤・岩佐・小柏

グループ5・小柏より：

最初の活動は、研修先の事前調査でした。テスト直前の忙しい中でしたが、分担を行って調査書を作成することができました。しかし、次第にメンバー間で活動に対する熱量の差が感じられるようになりました。その結果、全体学習会ではタイムマネジメントやZoomの画面共有を行う上でミスが生じ、グループの一体感の欠如が浮き彫りとなりました。そこで、翌日に対面で振り返りを行い、話し難い本音を共有すると共に解決策を全員で考えました。解決策には、例えば対面での活動を増やすことが挙げられました。そして、その反省を十分に活かせたのが先輩生との交流会です。対面での打ち合わせを何度も行い、タイムマネジメントを徹底して、参加者全員にとって有意義な場を作り上げました。さらに、川端先生との対話では、先生と先輩生からのご助言をいただき、各々の強みを活かして活動できるようになりました。具体的には、個人の状況を把握するためのスケジュール管理と、アイスブレイクのための許可を取った上での愛称決めを行いました。補足ですが、愛称は今も変動し続けています。また、定期開催の先輩生とのミーティングでは、図らずもメンバー各員の考えを知ることができ、何気ない意見共有の大切さを自覚しました。その結果、意見共有を積極的に行うようになり、各々が主体的に活動できるようになりました。

（文責：伊藤）

交流会・全体学習会の紹介

私たちは、海外研修への準備のために受講生交流会・全体学習会・先輩生との交流会を行いました。ここでは、各会の概要及び企画・運営を行ったグループによる振り返りを紹介します。

受講生交流会

日時：2023年1月11日(水)18:15～19:10 場所：Zoom 企画・運営：グループ4

参加者：受講生・川端千鶴先生・井上修平先生

グループ4・名和より：

私たちは、FSP生同士の親睦を深めるために、受講生交流会を実施しました。ブレイクアウトルームに分かれて各自が自己紹介を行い、その自己紹介を基に質問を出し合いました。初めて話す人が多く、最初はぎこちない会話でしたが、お互いを知ることによって徐々に打ち解け合うことができました。交流会を通して、目標であった「名前を呼び合うことができる関係」の構築へ、第一歩を踏み出すことができました。

先輩生との交流会

日時：2023年2月13日(月)18:15～19:15 場所：Zoom 企画・運営：グループ5

参加者：受講生・川端千鶴先生・井上修平先生・過去FSPに参加した先輩生の皆様

グループ5・伊藤より：

私たちは、FSPでの活動中に生じた不安を解消するために、先輩生との交流会を実施しました。4つのグループに分かれて現役生が質問し、先輩生に回答をしていただく形式をとりました。この交流会では、事前にアンケート調査を行い、第32回FSP生が先輩生から伺いたいことや、先輩のFSPでの研修先などをまとめました。そして、その結果を基にブレイクアウトルームのグループ分けを行いました。また、各グループでの内容の議事録を取り、後日その議事録はFSP生全員に共有をしました。当日だけでなく、事前の準備や事後のフォローを通して、私たちFSP生の不安は、着実に解消されたと思います。

全体学習会

日時：2023年2月8日(水)18:15～19:30 場所：Zoom 企画・運営：グループ2

参加者：受講生・川端千鶴先生・井上修平先生・

逢坂はるのさん(TA)・角田亮平さん(ボランティア)

グループ2・須藤より：

私たちは、FSP生全員が研修先に対する理解を深めるために、全体学習会を実施しました。全体学習会では、研修先について各グループが事前に調べたことをFSP生全員に共有し、その後質問の時間を設けました。また、目的を達成するために、調べた内容を全体学習会の前に共有する場を用意しました。さらに、全体学習会で回答できなかった質問とその回答を共有しました。そして、学習会で伝えきれなかったことで伝えたいことがある場合には新たな資料を作成して、Slackによる共有を行いました。実際に研修先では、全体学習会での学びを活かした多くの質問によって理解を深めることができました。



【全体学習会・研修先のInstitute of Molecular and Cell Biology (IMCB) についてのZoomでの発表の様子】

(文責：伊藤)

チームリーダーズの紹介

第32回FSPには、全体をまとめるチームリーダー1名とチームサブリーダー2名がいます。ここでは、活動概要と具体的な活動の例、チームリーダーズの振り返りを紹介します。

活動概要：プログラム全体のまとめ役・全グループのリーダーとの協力と連携・

スケジュール管理・担当教職員及び先輩生との連携

具体的な活動例：渡航前Zoom交流会の企画／運営・第4回授業での海外研修の目標発表・

海外研修期間内の振り返りMTGの企画／運営

メンバー：櫻庭（リーダー）・井手（サブリーダー）・千葉（サブリーダー）

チームリーダーズ・櫻庭より：

活動当初は、グループの垣根を超えた交流の機会がほとんどなかったため、私たちチームリーダーズは自主的に交流会を設けるなど、チーム全体の交流を促進しました。また海外研修中は先生方との連携をしっかりと取り積極的に情報を発信することを心がけ、活動を円滑に進められるように動きました。海外研修中は、その日の学びを振り返るMTGの企画と運営を自主的に行いました。クアラルンプールでの研修中に三人全員が体調を崩す場面もありましたが、各グループのリーダーをはじめ、他のメンバーの助けも借りて乗り切ることができました。

（文責：伊藤）



シンガポール

北海道大学校友会エルム・
シンガポールエルム会懇談

〈教育機関〉

Singapore Management University (SMU)

Ngee Ann Polytechnic (NP)

〈企業・機関〉

Institute of Molecular and Cell Biology (IMCB)

Xenolis Pte. Ltd. (Xenolis)

〈自主研修〉

シンガポール

北海道大学校友会エルム・シンガポールエルム会懇談

私たちの現地での最初の活動は、北海道大学校友会エルム懇談でした。これは、北海道大学の同窓生である、北海道大学シンガポール校友会エルム会（以下、シンガポール校友会）の皆様が開いてくださった懇談会です。懇談会は、私たちと同じ北海道大学を卒業された方々との対話を通して、身近な海外でのキャリアモデルを知ることができました。

私たちは、5つほどのグループに分かれてシンガポール校友会の皆様が用意してくださったお昼ご飯をいただきながら、現在シンガポールで実際にご活躍されている方のお話を聞くことができました。お話を伺うことで、海外で働くということのイメージが湧き、英語学習や何事にも挑戦する姿勢を持つことなど、これからの課題が見つかりました。また、海外の風土や文化への適応の難しさを聞いたことで、私たちが日本の固定観念に縛られすぎていることに気づかされました。

さらに、日本では社会に出ることが遅れてしまうことを気にする風潮がありますが、海外で働くにあたって、修士号・博士号を取得することや社会に出てから教育機関に戻る選択肢が普通であること、即戦力が重視されていて自分の強みを持つことが大事であることなど、さまざまな学びがありました。

私自身も将来やりたいことが決まらないまま今の学科まで進学してしまい、自分の職業に対する不安がありました。しかし、職業は学科や専攻にとらわれる必要がないことを学び、今までは自分で職業の選択肢を狭めていただけで、気持ちと努力次第では自分の可能性をどこまでも広げられることが分かりました。



【同窓生の皆様との集合写真】

（文責：安倍）

【教育機関】

Singapore Management University

私たちは2月27日(月)にSingapore Management University (以下、SMUと表記)を訪問しました。SMUは2000年に創立された大学で、2018年から北海道大学との大学間協定が結ばれています。

私たちがシンガポールの地下鉄を利用し、Bras Basah駅に到着すると、Japanese Cultural Club (以下、JCCと表記)の方々が私たちを出迎えてくださいました。そして、JCCの方々と共に、フードコートで昼食を食べました。今回の研修における最初の現地学生とのコミュニケーションだったため、FSP生全員が緊張した面持ちでしたが、JCCの方々と積極的に交流を図ることができました。

昼食後は、SMUアンバサダーのお二人が校内を案内してくださいました。そこで感動したことは、SMUの緑に溢れた美しいキャンパスとユニークなデザインです。さらには、フリー学習スペースやグループワーク用の個別ブースなど、学生交流やディスカッションをしやすい設備の工夫が数多く見られました。また、起業や進路に関して専門家や経験者に相談できる教室が設けられており、学生の活動を支える環境が整備されていることを実感しました。

次に、SMUアンバサダーのお二人が、SMUの学校制度や学校生活、クラブ活動についてのプレゼンテーションを行ってくださいました。SMUの授業形式はセミナー、グループプロジェクト、プレゼンテーションなどが主であり、学生の積極的な授業参加が評価においても重要視されているとのことでした。先生を囲むような机や、先生が指名できるように学生の名札を置くスペース、対話を主とした授業体制からも、相互的かつ能動的な学びを重視する姿勢を感じることができました。また、SMUはインターンシップの推進を行っています。SMU生は、学校が設けた最低基準に留まらず、学校のプログラムを活用して主体的にキャリアや仕事に向けて学んでいました。このプレゼンテーションを通して、SMUでの学びが、SMU生のキャリアに対する意識の高さを生んでいることに気付きました。そして、専攻以外の分野でも学校のプログラムやクラブ活動を通して、自分の興味を追求する姿勢を見習いたいと思いました。

私たちが北海道大学の魅力を伝えるプレゼンテーションを披露した後は、JCCの皆さんとの交流会を行いました。JCCでは日本文化に興味があるSMU生が日本文化や言語を中心に研究し、それらを広めるための活動をしているとのことでした。また、私たちのプレゼンテーションに熱心に耳を傾け、流暢な日本語で話しかけてくれた方もいました。JCCの皆さんは、チームメンバーからのヒントを元に、お題となっているシンガポールにまつわる単語を当てるゲームを用意してくださいました。そして私たちは、お土産として持参した日本の知育菓子を紹介しました。これらのアクティビティを通して、JCCの皆さんと交流を深めることができました。交流会後には、現地学生との課外活動としてJCCの方々とシンガポ

ール観光に出かけました。道中では、ジェスチャーを交えながら双方の文化や趣味について話し合うことや、共に食事をすることによって、言葉の壁を越えて交流することができました。

SMUでは、インターンシップや留学、起業に関する意識が強く、学生と先生との繋がりやそれらに関わる全ての工夫が、私たちに新しい刺激と興味を与えてくれました。北海道大学とSMU、それぞれが掲げる目標の違いが、授業体制や設備の違いに現れているように感じました。北海道大学とSMUでさまざまな違いはあるものの、身の回りにある環境を最大限に活用して自らのキャリア形成や視野の拡大につなげる姿勢は共通して重要であると気づきました。



【JCCの方々との交流の様子】

(文責：井手)



【JCCの方々との集合写真】

【教育機関】

Ngee Ann Polytechnic

私たちは2月28日(火)にNgee Ann Polytechnic (以下、NPと表記) を訪問しました。Polytechnicとは、実務教育を行う3年制のシンガポールの専門学校のことです。3年の課程を経て、一部の学生は大学へ進学します。NPは1963年に設立された国立の学校であり、工学部、人文科学学部、ビジネス&アカウンタンスー学部、School of Film & Media Studiesなどさまざまな種類の学部が存在し、実学(職業教育)を中心に教育課程が編成されていることが特徴です。

最初にNPでは、学内のフードコートに案内していただき、NP生と一緒に昼食を取りました。そして一緒にテーブルに座った学生と交流しながら、お互いの学校生活や国の文化を知ることができました。中でも印象的だったのはお互いの文化のマナーを直接伝え合ったことです。例えば、私が中国にルーツがある学生たちと食事をした際、その学生の一人が、「自分たちの文化では、箸を横に置くことが食事を終えた合図だ。」と予め教えてくれました。それを伝えてくれた理由を尋ねた所、日本の文化ではその合図がマナー違反になるのではないかと配慮してのことだったそうです。この一通りの会話から、お互いの文化を伝え合うことで尊重しようとする多民族国家としての側面を感じました。

次に、講堂での学生交流がありました。そこで、まずNP生からシンガポールとNPについてのプレゼンテーションをしていただきました。NPのキャンパスの大きさを「東京ドーム7個分」という日本人に馴染みのある表現を用いて説明してくださるなど、NP生によるプレゼンテーションは、聞き手である私たちが内容を理解しやすいように配慮して下さったことが伝わるものでした。続いて、私たちから北海道大学の魅力を伝えるプレゼンテーションを行いました。この時、NP生が私たちの話を受けて驚きの声をあげる様子や笑って頷く様子がみられ、熱心に反応して下さったことでその場の一体感が生まれており、プレゼンテーションにおける聴衆の反応の大切さを実感しました。プレゼンテーションは話し手と聞き手の協働によって成立することを学びました。

その後、5~8人ほどのNP生とグループを組み、シンガポールの街を案内していただくアウトティングと呼ばれる課外活動に参加しました。行き先は、ブギス・ストリートやシンガポール国立博物館、ニュートン・フードセンターなど多岐にわたり、グループ毎に異なる場所で交流を楽しむことができました。このアウトティングでは、海外の学生と接することに対する認識の変化がありました。海外研修前は、私たちと異なる文化背景を持つ学生と交流することに対して不安がありました。しかし、コミュニケーションを取っていくうちに、日本のアニメなど共通の話題で盛り上がったことで緊張がほぐれ、文化が違ってもお互いを理解し合えることを知りました。また、日本語が通じない相手と長時間コミュニケーションを取り続けることに不安を抱くメンバーが多くいましたが、英語だけに固執せず、ボディランゲージや写真などを用いることで会話を成立させることができました。この経験から、意思疎通にとって重要なのは言語能力の高さではなく、伝えようとする意欲なのだと学びました。

NP生との交流全体を通して、NP生から私たちをもてなそうという気遣いを随所で感じました。例えば、歓迎のメッセージが添えられたお土産をくださったことや、アウトティングの時に丁寧に道案内をしてくださったことなど、数々の配慮をしてくださいました。その

結果、学生交流が円滑に進み、有意義な時間を過ごすことができました。私たちも、留学生を受け入れる際には、NP生と同じように相手のことを考えて行動したいと感じました。積極的に対話しお互いを尊重しようとする姿勢を持つことで、異なるバックグラウンドや価値観を受け入れ、交流しやすい空気づくりを率先して行っていこうと思います。



【NP生との集合写真】

(文責：千葉)



【ブギス・ストリートでのアウトティングの様子】

【企業・機関】

私たちは2月28日(火)にInstitute of Molecular and Cell Biology (以下、IMCBと表記)の杉井重紀様(Principal Investigator)と、Xenolis Pte. Ltd. (以下、Xenolisと表記)の平尾一郎様(Chief Scientific Officer)、木本路子様(Chief Operating Officer)に御講話をいただきました。

Institute of Molecular and Cell Biology

IMCBは、シンガポールの主要な国立研究開発機関であるシンガポール科学技術研究庁(Agency for Science, Technology and Research 以下、A*STAR と表記)傘下であり、細胞及び分子生物学の研究を行う研究所です。杉井様はIMCBにて脂肪由来幹細胞の臨床応用や、魚細胞由来の脂肪を使った培養肉の開発の研究を行っています。御講話では、IMCBで働くに至った経緯について伺いました。杉井様は学生時代から漠然とアメリカに行きたいという意識があったため、京都大学を卒業後アメリカへ渡航し、現地の大学院で博士号を取得してバイオ医学について研究をされていました。その当時、シンガポールはバイオ医学分野を国の基幹産業にするために、研究に多額の投資をしていました。そのため、シンガポールに拠点を置いてIMCBにお勤めになりました。続いて、杉井様のキャリア形成について伺いました。グローバルに活躍されている杉井様から学んだ視点は私たちにとっても興味深く、海外への見方が変わるものでした。私たちの多くは、海外で働くことに対して無意識に壁を感じていましたが、杉井様の御講話を伺い、海外で働くことは目的を達成するための手段の一つであって特別視する必要はないと気付くことができました。さらに杉井様は、アメリカの大学院に在籍している中で気づいた留学の利点として、英語力の向上、自分で問題を解決しようとするサバイバルスキルの習得、多彩な人脈の形成を挙げられていました。また、アメリカでは、大学院への進学に対して日本とは異なる点があると教えていただきました。具体的には、大学と異なる大学院に進学することが一般的であることや、大学院には家庭を持つ人や働いた経験がある人も多く在籍しているということです。多様な生き方があることを知り、私たちのキャリアに対する視野がいかに狭いものであったかに気づかされました。

Xenolis Pte. Ltd.

Xenolisは、A*STARから独立した、バイオテクノロジーに関する研究開発を行っている会社です。平尾様、木本様は人工的に作り出した核酸塩基対によって遺伝情報を拡張することで、高親和性、高特異性のDNAアプタマーを開発しています。お二方からは、抗体に代わりウイルスの正確な診断に役立つと期待できる、このDNAアプタマーの例についてのお話を

伺いました。また、お二方がシンガポールに拠点を移したきっかけは、意図したものではなかったというお話もありました。平尾様は理化学研究所（以下、理研と表記）に所属して研究室を主宰していた59歳の時に、A*STARの傘下であった研究所、IBN（後のIBB）への研究室の移籍を提案され、知らない土地で新たなことに挑戦したいという気持ちから、A*STARでの研究を始められました。一方で木本様も理研時代の平尾研究室がシンガポールへ移籍することに伴い、それまで海外志向ではなかったもののシンガポールのA*STARでの研究を始められたそうです。キャリア形成には、自分の意志だけではなく、周囲の環境も大きく影響するということを実感しました。

御講話の後にはIMCBの研究所内を案内していただきました。普段は目にするもののない最先端の研究設備を目にする貴重な経験でした。

全体を通して、お三方のキャリア形成は私たちにとって刺激的なものでした。お三方のキャリアは綿密に計画されたものというよりも、周囲からの誘いやもう少し研究を続けたいといった意思などによって偶発的に、柔軟に形成された部分が大きいということが印象的でした。御講話を聞いたことで、キャリア形成においては計画性も重要なものの、訪れたチャンスを掴むことや新しいことに挑戦する勇気も同様に重要だということに気付くことができました。これからは、海外も含めた広い視野を持って今後のキャリアについて考えていきたいです。



【平尾様の御講話を受けるFSP生の様子】

（文責：櫻庭）

【自主研修】

私たちは、シンガポール、及びマレーシアのクアラルンプールとペナンの三つの地域で自主研修を行いました。本頁では、2月26日(日)のシンガポールでの自主研修を紹介します。マレーシアの自主研修については、P. 40～41をご覧ください。自主研修では2人以上の班に分かれ、それぞれの班が立てた計画に沿って、その地域の歴史や風土に触れました。自主研修では、自分で計画を立てて町へ出るため、調査を十分に行うことやタイムスケジュールの管理などを行う必要があります。この過程から、自分の意思を常に持って行動する重要性に気付くことができました。そして自主研修を通して、渡航前には知ることができなかった、現地ならではの発見に数多く出会いました。

シンガポール

シンガポールでの自主研修の一例を挙げます。私たちの班では、War Memorial Park (戦争記念公園) とNational Museum of Singapore (シンガポール国立博物館) を訪れました。これらの場所を訪問した目的は、日本の学校では学ぶ機会の少ない、シンガポールが日本に占領されていた歴史を学ぶことです。

戦争記念公園には、「日本占領時期死難人民記念碑」と呼ばれる塔があります。私たちは、市民の憩いの場として活用されている公園の様子を目にしました。中には、記念碑のすぐそばでスマートフォンを使って写真を撮影し合う若者の姿も見受けられました。戦争の苦しい雰囲気はなく、町の中に平和に溶け込んだ公園の様子は、事前学習では分からないものであり少し意外に思えました。


続いて私たちは、シンガポール国立博物館を訪れました。シンガポール国立博物館では、シンガポールが国として成立する以前から現在に至るまでの歴史が、さまざまな展示物と共に示されていました。特に私たちは、シンガポールが日本に占領されていた時代の歴史が印象に残りました。なぜなら、日本がシンガポールの人々に与えた苦しみの説明を聞いている子どもの姿を目にしたためです。戦争による悲劇の説明を受ける子どもの姿は、日本の戦争の歴史を学んでいた幼い頃の私と重なり、共感することができました。私たちは、シンガポールでの自主研修を通して、戦争の歴史を多角的に見ることができた上に、今後平和を実現させていくために私たちにできることを考えるきっかけとなりました。



【戦争記念公園の日本占領時期死難人民記念碑】
(文責：伊藤)



【シンガポール国立博物館】



マレーシア

〈教育機関〉

Management and Science University (MSU)

Universiti Sains Malaysia (USM)

〈企業・機関〉

大日本印刷会社

—DNP Imagingcomm Asia Sdn. Bhd. (DNP)

世界銀行マレーシア事務所 (世界銀行)

〈自主研修〉

クアラルンプール

ペナン

【教育機関】

Management and Science University

私たちは3月3日(金)に、Management and Science University (以下、MSUと表記)を訪れました。MSUは2001年に創立された医学部、経営学部、情報工学部、ホスピタリティーデザイン部などの9つの学部と7つの大学院を持つマレーシアの私立総合大学です。

MSUでは、最初にキャンパスツアーとして医療学生が研修に使う施設や病院を訪れました。医療学生が学ぶ設備に関しては、実際に病院などで働くことを想定して作られており、すぐに現場で活かせるような知識や技術を身につけられる設備が整っていると感じました。その例として、古い病院と新しい病院のどちらに配属されても良いように、両方の設備で実習を行う環境が整備されていることが挙げられます。次に図書館を訪れました。MSUの図書館は3階建てであり、勉強の他、グループディスカッションをするためのフロアがあります。さらに、昼寝をする場所やボードゲーム、映画、カラオケなどが楽しめるスペースまであり、学生の交流の場として図書館が機能していました。図書館に堅苦しい雰囲気がなく、気軽に利用できる環境が整備されていることは、日本の大学図書館の形態と大きく異なるように感じました。

キャンパスツアーを終え、私たちはFaculty of Business Management and Professional StudiesのKhairul Anuar Rezo先生よりInternational Business (国際ビジネス)の講義を受けました。この講義では、International Businessに関する具体例を交えた明瞭な説明がありました。各国の状況によって政治や経済、法、文化が異なり、それはグローバル化が進む市場に大きな影響があることについて学びました。具体的には、世界各国の食文化がグローバル企業の商品展開にも影響を与えることについて、マクドナルドのメニューを例に説明してくださいました。以上の具体例は私たちにとって身近で想像しやすいものであり、非常に興味深い内容でした。また、講義スタイルは、私たちと教授との距離が物理的にも心理的にも近く、講義中に質問がないか頻りに尋ねられるものでした。このように双方向のコミュニケーションがなされる授業形態は新鮮であり、私たちも積極的に講義に参加することができました。

その後、MSU生と一緒に昼食を食べました。食事を一緒に取るという経験をすることで、よりいっそうMSU生と距離が縮まったように思います。また、MSU訪問以前に私たちが訪問した教育機関での学生交流では、自分から積極的に話しかけられなかったという反省が多く出ていました。そこでMSUではその振り返りを活かし、私たち側からも積極的にコミュニケーションを取ることができたように感じました。

最後に、Malay Traditional Music (マレーシアの伝統音楽)の講義を受けました。ガムランという銅鑼やコンパンという太鼓をはじめとしたマレーシアの伝統的な楽器を演奏し、マレーシアの歌を歌いました。また、キーボードや打楽器のカホンといった私たちにとって身近な楽器も組み合わせることで、独特な雰囲気の音楽が作り上げられていました。ま

た、体験型の講義であったことから、リラックスしてこの授業を楽しめました。今まで私たちは、コミュニケーションの手段と言われると一番に言語を考えていました。しかし、この授業では英語をあまり使わなくてもジェスチャーや音名、コード名などを通してお互いにコミュニケーションを取ることができました。そこから、私たちはコミュニケーションの手段は言語だけではなく、音楽など別の形態もあることを改めて実感することができました。



【International Businessの講義】



【Malay Traditional Music の講義】

左写真引用：MSU 『Hokkaido students' study trip to MSU』

(<https://www.msu.edu.my/blog/mar23/lifestyle/hokkaido-study-trip>)

(文責：岩佐)

【教育機関】

Universiti Sains Malaysia

私たちは3月6日(月)にUniversiti Sains Malaysia (以下、USMと表記)を訪問しました。USMは本学の協定校の一つで、マレーシア全域に4つのキャンパスを有しています。今回はペナンにある工学部のキャンパスを訪問しました。USMのキャンパスは、北海道大学のキャンパスと同様に街や自然と一体化していたため、親しみを覚えました。

最初に教授よりUSMについての説明をしていただきました。北海道大学だけでなく日本の企業との関係も複数あり、インターンシップなども行っていることに驚きました。続いて、環境保護と資源開発のバランスについての講義をしていただきました。講義からは、マレーシアの経済発展とその背景にある資源開発について学ぶことができました。これからは経済発展と同時に環境を守るために、資源開発と環境保護のバランスをとる必要があります、その取り組みを具体的に教えていただきました。また、理系は男性が多数だと考えていた私にとって、鉱物資源工学科に女性が多かったことは驚きでした。ある女性の学生に鉱物資源工学を専攻にした理由を伺うと、「フィールドワークができるから。」と答えていただき、日本ほど性別が意識されていない環境に驚きました。他にも、聴衆の目を見ながら大事な所を強調する話し方やジェスチャーを使った伝え方など、USM生の上手な発表を見て多くのことを学ぶことができました。

次に、現地の学生と共に開放的な屋外の食堂でランチを食べながら交流をしました。大学は長期休暇中でしたが、ナシ・チャンプルやスターフルーツなどのマレーシアの食事をいただきつつ、お互いの趣味や専攻の話などで楽しみました。また、USM生の何人かは右手でそのままご飯を食べていて、イスラームの文化を肌で感じることができました。

その後キャンパスツアーとして、Science and Engineering Research Centreという研究室が集結している施設を見学しました。物質の表面をナノスケールで解析できる顕微鏡や微量でも含まれている物質を検出することができる機器など、最新機器を数々紹介していただきました。普段見ることのできない特別な実験器具や機器を実際に見ることができたことは貴重な経験になりました。

最後に学生交流では、5、6人のグループに分かれて、1枚の紙を用いて自由な発想で紙コップを作るゲームを行いました。最終的には作ったコップに実際に水を入れ、水がこぼれないかを確認しました。初めは1枚の紙でコップを作ることに戸惑いがありましたが、意見を出し合ううちにUSM生との関係も深まり、それぞれのグループが個性的なコップを作り上げて盛り上がりました。その後、FSP生がプレゼンテーションを行い、北海道大学の魅力を伝えました。

講義や学生交流を通して、性別にとらわれない環境や多様な文化に触れることができました。そこから私たちは視野の狭さを痛感し、他の文化を受け入れる必要性を感じたと共に、日本の常識にとらわれず外にも目を向けていこうと思いました。



【USM生との交流の様子】

(文責：須藤)



【USM生との集合写真】

【企業・機関】

大日本印刷会社—DNP Imagingcomm Asia Sdn. Bhd.

私たちは、3月1日(水)にマレーシアのジョホールにて大日本印刷会社—DNP Imagingcomm Asia Sdn. Bhd.を訪問し、小川庸介様 (Managing Director)、馬場隆様 (Senior Engineering Manager)、野上裕紀様 (Senior Sales Manager)、吉田夏樹様 (Senior Sales Manager)、土光悠太様 (Senior Finance & Admin Manager)、久永裕二様 (Production Advisor) に御講話をいただきました。DNP Imagingcomm Asia (以下、DNPと表記) は、インクリボンの各色染料を熱によって受像紙に転写し印刷する技術を用いた「昇華型熱転写媒体」のアジア初の製造拠点として設立されました。写真プリントなどに使用する昇華型熱転写メディアや、物流用バーコードや食品包材への日付印字などに使用する溶融型熱転写インクリボンを世界中の顧客、特にアジアの顧客向けに製造・販売しています。

まず、土光様より、DNPについての説明をしていただきました。事前に事業概要等について学んでいましたが、土光様の御講話と質疑応答を通して、顧客のニーズに合わせて海外進出をした経緯が分かり、より詳しく事業について理解することができました。

次に、野上様に御講話をいただきました。野上様のお話では特に、自分へのフィードバックとしてこまめに自分の業務履歴書をアップデートされていることが印象に残りました。自分の今までの活動を振り返ることによって、忘れがちな自分の成功体験を思い出すことができ、今後の自信に繋がるそうです。その日の夜にFSP生で御講話を振り返った際には、野上様のお話を参考にして、実際に自分の履歴書のようなものを作成したいという意見も出ました。

続いて、吉田様に御講話をいただきました。吉田様からは文化や習慣の違いを受け入れること、先入観や固定概念にとらわれないことの大切さを学びました。吉田様は、過去に文化や習慣の違いへの理解が甘く、それぞれの国の顧客のニーズに合わせた製品の販売に苦労した経験があるそうです。私たちも実際に渡航して、自分が想像していたより人種や文化の違いはないと実感したものの、先入観で勝手に決めつけてしまう場面がよくあるため、改善していかなければならないと感じました。

さらに、馬場様に御講話をいただきました。馬場様からは、コミュニケーションには根気強さが大事であることを学びました。馬場様はマレーシアに配属された当初は英語があまり得意ではなく、英語でのコミュニケーションに戸惑いもあったそうです。しかし、上手く英語が伝わらない時は絵や写真を用いて説明していたことを教えてくださいました。私たちは海外の学生との交流の際、英語がうまく聞き取れないときにそこで諦めてしまう場面が何度かありました。そのため、コミュニケーションの際には根気強さが重要であるというお話は強く心に刺さり、英語が一回で聞き取れなくても、何度も聞き返そうという意識が芽生えました。

最後に、小川様に御講話をいただきました。小川様は日本、マレーシアだけでなくアメリカで働いていた経験があり、アメリカ、マレーシア、日本の文化の違いを寸劇を交えて分かりやすく教えていただきました。小川様のお話の中で特に印象に残っているのは、「ゆでガエル現象」についてのお話です。ゆでガエル現象とは、水槽の中の水温を徐々に上げていくと、カエルはその変化に気付かずに死んでしまうというものです。これは、「ゆっくり迫りくる危機に気付く難しさ」を意味する例えです。私たちは小川様から、ゆでガエル現象に陥らないために自分や自分の周囲を常に客観的な視点で見ることが大切であることを学びました。私たちの中には、この現象が自分にも当てはまっていると考える人が多く、自分や自分の周囲を客観的に見ようとする意識が高まりました。

御講話の後には、久永様に工場を案内していただきました。工場では実際に熱転写媒体用のインクリボンと受像紙を製造し、箱に詰めるまでの過程を見学させていただきました。

DNPの皆様の御講話はとても内容が濃く、予定時刻を押してしまうほどの多くの質問がFSP生から出ました。どの質問にも丁寧にお答えいただき、私たちはキャリアを形成する上で重要な多くのことを学ぶことができました。これからは周囲を客観的に見ることを心掛け、変化を恐れずにたくさんの方に挑戦して、将来のキャリアを考えていきたいと思いをします。



【御講話の様子】

(文責：飯田)



【DNP様との集合写真】

【企業・機関】

世界銀行 マレーシア事務所

私たちは3月7日(火)に世界銀行マレーシア事務所(以下、世界銀行と表記)を訪問し、松田康彦様(Country Manager for Malaysia)による御講話をいただきました。世界銀行の理念は「極度の貧困の撲滅」と「繁栄の共有の促進」であり、最貧国への資金援助や技術援助、政策助言を行うことで格差を解消し、均衡のとれた経済成長を促進する活動を行っています。初めは銀行という言葉から、世界銀行のお仕事は金融関係のみなのではないかと想像していました。しかし、世界銀行は教育や保健、農業など幅広い分野を対象としており、さまざまな分野の方が協力して政策助言や技術援助を行っていることを学びました。今回訪問した世界銀行マレーシア事務所は、2015年にマレーシア政府からの誘致により創設され、マレーシア政府に対しては資金援助をせず、技術援助と政策助言を行っています。

松田様の御講話や質疑応答を通して、私たちには多くの学びがありました。特に、日本人の欠点、リーダーシップとは何か、ご自身のキャリア形成についてのお話が印象に残りました。まず日本人の欠点について、松田様は国際的な機関で働いている中で「日本人は言葉にして伝えることが苦手で、言わずとも察してほしいと考える傾向にあること」に気づいた」というお話をされていました。このお話を聞き、自分の普段のコミュニケーションを振り返ってみると、無意識に自分の常識や考えが他者にもあてはまると思い込み、コミュニケーションを疎かにしていたことに気づきました。一方で他者に対しては、考えの共有をしてくれないとどのように行動するべきかが分からないと覚えることもあり、言葉で伝え合うことの重要性を改めて認識しました。

また、「リーダーシップは組織のリーダーのみが発揮するものではなく、組織にいる全員が発揮するものだ」というお話をいただきました。私たちはこのお話を通して、リーダーだけでなくチームの全員が自分の役割を自覚し、行動する必要があることを強く自覚しました。松田様のリーダーシップは「部下に指示を出すのではなく、やりがいや方向性を持たせてあげること」でした。さらに、積極的な発言が少なくても、他人の話をしっかりと聞き、決定的なタイミングで流れを変える発言ができる力もまた、リーダーシップの一つであるというお話がありました。このことから、リーダーシップは多様な側面を持っているため、各個人が発揮できる場は必ずどこかにあるということがわかりました。

最後に、松田様のキャリア形成についてのお話も伺いました。松田様は、大学生時代に交換留学に好奇心で申し込み、1年間アメリカに留学されていました。その後交換留学を終え、留学先での自由な生き方が性に合うことに気づき、再び戻るため、アメリカの大学院に進学することを決断されました。留学前はジャーナリストを夢見ていましたが、留学を経験して学者をはじめとしたジャーナリスト以外の職業にも目を向けるようになったそうです。その中で、自らの力を世界に活かしたいとの思いから国際機関で働くことを視野に

入れ、就職試験に一度は不合格となったものの、偶然の出会いを機に国際機関である世界銀行への採用に繋がったそうです。つまり、松田様は交換留学という大きな一歩を踏み出した結果、偶然の契機にめぐり合い、それらを有効に活用したことで今の素晴らしいキャリアを築かれたということがわかりました。未知なるものへ一歩を踏み出すことによって、新たな出会いが構築されることを学びました。そして、私たちの消極的な姿勢がいかに契機を逃していたか、またこれから逃していく可能性があるかに気付くきっかけとなりました。

今回の世界銀行への訪問、そして松田様の御講話を通して、私たちの視野の狭さや、世界銀行で働く方やリーダーシップなどについて固定観念の多さに気付くことができました。自国という狭い枠組みを超え、未知なる文化、価値観に触れることがグローバルに活動することへの第一歩のように感じました。キャリアについても偶然の機会を経て形成される場合が多いことを知り、一つひとつ出会いを大切にしていける必要があることを学びました。



【世界銀行での集合写真】



【質問をするFSP生】

(文責：田中)

【自主研修】

マレーシア

私たちは、マレーシアのクアラルンプールとペナンで自主研修を行いました。本頁では、3月4日(土)のクアラルンプール、3月5日(日)のペナンでの自主研修を紹介します。自主研修の概要及びシンガポールでの自主研修については、P. 29～30をご覧ください。

クアラルンプール

今回のFSPでは、多くの宗教が混在する地域をいくつも訪れました。クアラルンプールはその一つで、私たちの班はヒンドゥー教の聖地であるBatu Caves（バトゥ洞窟）とイスラーム教の礼拝堂であるMasjid Negara（国立モスク）、世界的なイスラーム美術への高まりから1998年に作られたIslamic Arts Museum Malaysia（以下、マレーシアイスラーム美術館）を訪れました。バトゥ洞窟では272段の急な階段を上った先に大鍾乳洞があり、あらゆる所にヒンドゥー教の神々が、そして奥の寺院には聖者スブラマニアンが祀られていました。バトゥ洞窟の持つ雰囲気は、日本では感じるることのできない別世界のようにとても新鮮でした。また、宗教の聖地でありながらも、観光客で賑わう様子もみられました。この研修後、多くのメンバーと宗教の聖地が観光地として利用されていることについて議論しました。賛成意見として、普段触れることができない宗教の雰囲気を学ぶことができる、という意見が挙がった一方で、反対意見として、その宗教が尊重されているのか、と疑問視する意見が挙がりました。このように現地で感じたことを自分の中に留めるのではなく、さまざまなメンバーと議論することができたことは、FSPの魅力の一つであるように思います。次に訪れた国立モスクでは、肌の露出を避けるため、ローブとスカーフを身につけて入ることが決められていました。それらのさまざまな決まりごとから、宗教によるルールの違いを実際に感じることができました。さらに、私たちはそのまま徒歩でマレーシアイスラーム美術館を訪れました。そこではイスラーム美術の展示品が世界中から集められており、私たちは日本の歴史上の生活道具との共通点や違いに触れることができました。



【ヒンドゥー教の聖地バトゥ洞窟】



【イスラーム教の礼拝堂国立モスク】

ペナン

ペナン島の中心地であるジョージタウンは、18世紀末からのイギリス植民地時代の姿が残されており、世界遺産に登録されています。私たちの班は、その歴史的なペナンの町を歩き、Fort Cornwallis (コーンウォリス要塞) を訪問しました。コーンウォリス要塞は東インド会社が建設したもので、イギリス植民地の時代を象徴する砦となっています。ジョージタウンの町並みは、コロニアルカラーである薄茶色の屋根が特徴です。この町の様子を観察しながら歩くことによって、マレーシアがイギリスの植民地であったことを肌で感じることができました。一方で、ペナンの歴史についての理解が浅かったことから、得られた学びは少なかったです。そのため、その夜に私たちはFSP生5人と共に、科目担当教員の井上先生からペナンの歴史・政治などの背景を学びました。



【コーンウォリス要塞の様子】

(文責：伊藤)



【コロニアルカラーの屋根が特徴のペナン】



事後活動

事後授業・成果報告会

参加者の声



事後授業・成果報告会

今回の事後授業は、3月8日(水)に実施されました。これまでのFSPでは、事後授業は帰国後に行われており、海外研修期間内での事後授業の実施は初めての試みでした。事後授業は成果報告会を兼ねて行われました。この会は、授業を通しての学び、つまり成果の総まとめを発表し共有することを目的として4部編成で行われました。なお、グループ発表は次回FSPの募集の時期に学内で限定公開するために録画されています。

第1部では、成果報告会のために編成されたグループごとに、合計30分（質問時間：10～15分を含む）で振り返りと成果を発表しました。各グループで研修中の振り返りから学んだことをまとめ、プレゼンテーション形式でパワーポイントを用いながら発表しました。主に海外研修期間前後の変化に注目して発表するグループが多かったです。全体的に私たちが注目していた観点としては、授業でのメール作法、グループでの協力などで注力したこと、そこで生まれた課題、またそのために考えた解決策などが挙げられます。また、主に学んだこととしては、「私たちがFSPに参加する当事者意識を持つこと・チームを改善する意見を相手に伝えること・英語を伝えようとする姿勢・軸を持つこと・人との出会いの大切さ」などが挙げられました。質問時間では、約10分の時間を十分に活用して、発表者に対して疑問を投げ合いました。発表者に、自身が持つ強みを聞くなど、仲間の意見を知りたいというFSP生の興味が伝わる時間となりました。

第2部では個別発表を行いました。24人全員が1人あたり1分30秒以内で、学んだことや振り返りを発表しました。具体的には、「自身の知識不足・実体験・主体性・キャリアに対する姿勢・英語に対する意欲・人との繋がり・価値観の違い」などについての反省・目標が発表されました。個々の発表を通して、この授業全体での学びを活かそうというFSP生の前向きな意見が伝わってきました。第1部とは違い個人の意見の共有をすることで、仲間が特に着目していた点と学んだ点を細かく知ることができました。改めてお互いに刺激を受ける有意義な時間でした。

第3部ではリーダーとサブリーダーが振り返りを発表しました。主な内容は、第4回事前授業で、3人が気にかけてほしいと全体に共有した「社会性、探究心、柔軟性」の3点に対する海外研修期間の振り返りです。チームをまとめるためにとりわけ尽力してくれた3人がチーム全員に対する反省と今後の課題の提示をしてくれたことにより、私たちのFSP終了後の結束が更に高まりました。まず「社会性」については、多くのメンバーが受け身になってしまい、FSP生全員で研修を作り上げるという意識が薄かったことが反省として挙げられました。しかし、リーダー・サブリーダーが海外研修中に体調を崩した際には、それを補うためにメンバー全員が主体的に動くようになりました。このことから、リーダー・サブリーダーなどの役職を持つ人だけでなく、誰もがリーダーシップを発揮できるようにすることが課題として提示されました。次に「探求心」については、訪問先でたくさんの質問をするなど、学びたいという意欲を持って真摯に物事に取り組んでいたという振り返りがありました。そして、この姿勢を普段の大学の授業においても持つことが今後の目標として挙げられました。最後に「柔軟性」については、FSP生全員での意見の共有が不足し、

柔軟に行動できていなかったことが反省として挙げられました。そのため、今後の課題として、お互いのことをさらに知っていくことが挙げられました

第4部では、川端千鶴先生・井上修平先生・TAの逢坂はるのさんから総括をいただきました。とりわけ、川端先生から伺ったクリティカルシンキングに関する視点が今も印象に残っています。この視点を得たことで、指摘していただいたことをそのまま素直に受け止めるだけではなく、自分自身で考えなければいけない、という点に気付かされました。例えば、グループ1が作成したプレゼンテーションの英語に間違いがあったにもかかわらず、FSP生の中で誰も指摘する人がいなかった、というご指摘を受けました。そのお話から私たちは、素直さとクリティカルシンキングの両方を持つことの大切さを学びました。

このように、成果報告会では全体を通して学んできたものをチームで共有し、整理しました。この報告会により、これからの自分たちのキャリアや学び、課題について再認識することができました。



【リーダー・サブリーダーの発表】

(文責：小柏)



【グループ発表】

参加者の声

私たち成果報告書作成班は、今回のFSPに参加した学生24名を対象に独自にアンケート調査を行いました。アンケートは単一回答です。実際にFSPに参加した私たちの声が、読者の皆さまの参考になれば幸いです。

まずは、今回のFSPに参加した1番の動機を尋ねました（図1参照）。その結果、「海外への興味があるため」が8名、「キャリアの形成に生かすため」が5名、「英語能力の向上のため」が3名、「コミュニケーション能力の向上のため」が2名、「その他」が5名、という回答でした。「その他」の解答としては、「異文化理解力の向上のため」「チームワークの経験を得るため」「消極的な自分を変えるため」「人生に楽しみを増やすため」「なんとなく」が挙げられました。これらの結果から、FSP生は必ずしも特別な目的を持ってFSPに参加しているわけではないこと、それぞれが何かしらの思いを持ってこのプログラムに参加していたことが分かります。

次に、今回のFSPで最も学びに繋がった出来事とその理由を尋ねました（図2参照）。「企業・機関等での御講話（以下、御講話）」及び「教育機関への訪問（以下、教育機関）」がそれぞれ7名、「北海道大学シンガポール校友会エルム懇談（以下、校友会エルム懇談）」及び「成果報告会」が3名、「事前学習」及び「その他」がそれぞれ2名という回答となりました。「その他」の回答としては「自主研修」、「振り返り」が挙げられました。

主な理由例：

御講話：「（企業・機関等で）働く人のマインドが私と根本的に違うことに衝撃を受けたから。」

教育機関：「学生交流の中でどうやって英語でコミュニケーションを取ればいいのか理解できたから。」

「私たちが温かく迎えてくださるおもてなしの心に感銘を受けたから。」

「今までの友人とは異なる人と交流できた喜びを実際に体験できたから。」

校友会エルム懇談：「シンガポールで活躍している人の生の声を聞いたことで、具体的なイメージを思い浮かべる助けとなったから。」

成果報告会：「自分たちなりの考えをまとめて発表ができたことに加え、他のグループの人たちの思いも知ることができたから。」

事前学習：「今振り返ると十分だったとは言えないが、事前学習がないと研修をただ受けるだけで終わっていたように思うから。」

その他（自主学習）：「計画の大切さを学べたから。」

「現地の博物館に訪れたことが非常に良い学びとなったから。」

その他（振り返り）：「自分の考えを整理すると共に、他のメンバーや先生の率直な思いなどを聞くことができたから。」

最後に、今回のFSPで最も高まった能力とその理由を尋ねました（図3参照）。その結果、「コミュニケーション能力」及び「主体性」がそれぞれ10名、「異文化理解能力」が4名、という回答となりました。

主な理由例：

コミュニケーション能力：「英語を自由自在に使えずとも、伝えようと頑張れば交流できるというのは自分にとって重要な気付きだったから。」

「グループ活動などチームワークの困難さを学んだから。」

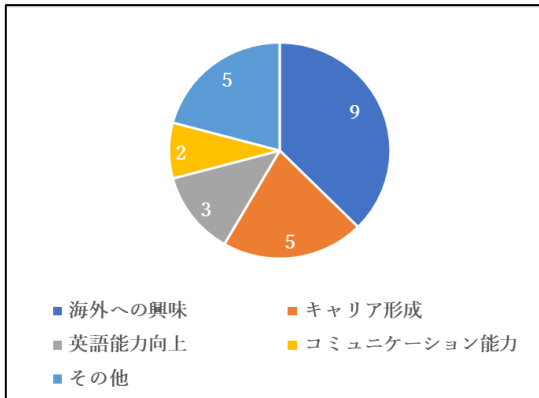
主体性：「自分から発信し動くことが大切で、そうでないと他人に伝わらないと分かったから。」

「自分で考え、行動する機会が多かったから。」

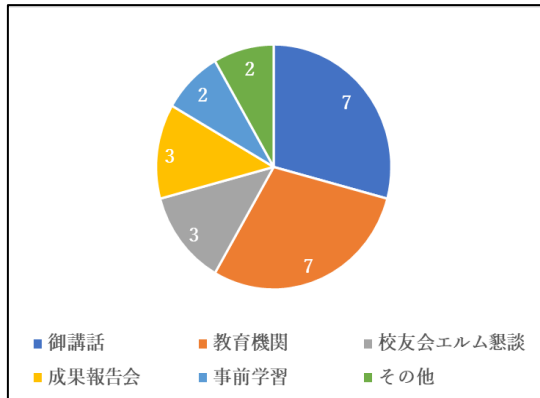
異文化理解能力：「人それぞれ価値観が違う中で他者と信頼を形成するには、異文化理解能力が大切だと学んだから。」

「宗教施設の見学や食事、風土から身を持って異文化を感じる事ができたから。」

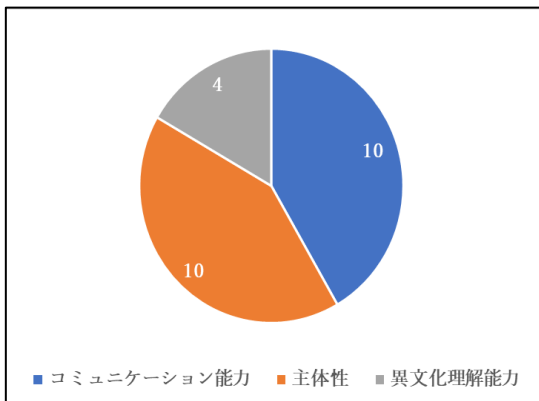
これらの結果より私たちは、FSPを通してコミュニケーション能力、主体性、異文化理解能力の重要性を肌で感じる事ができたということがわかります。また、FSPを通してこれらの能力の向上を感じたメンバーもいました。



【図1：1番の参加動機】



【図2：最も学びに繋がった出来事】



【図3：最も高まった能力】

(文責：伊藤)



終わりに

謝辞

編集後記

謝辞

お忙しい中、私たちのために海外研修にて御協力くださった御講話者様や大学の皆様に、感謝の意を申し上げます。誠にありがとうございました。また、長い間FSP終了後の学びにまで繋がるようなご指導をしてくださった科目担当教員の川端千鶴先生や井上修平先生、親身になって御支援下さったTA・ボランティア先輩生の皆様、事あるごとに私たちをサポートしてくださった事務スタッフの綿世様・木下様・劉様、大変ありがとうございました。
(文責：岩佐)

編集後記

FSPの活動を通して、人とのコミュニケーションの大切さを学びました。訪問先での御講話や海外研修中のFSP生との語らいでたくさんの刺激を受けました。実際にこの報告書を作成するにあたって、訪問先の方々、先生方、先輩生、第32回FSP生等たくさんの人に協力していただきました。この報告書で多くの学びを伝えることができれば幸いです。

(安倍直哉)

報告書の作成にあたり、共に海外研修から帰国したばかりのFSP生と話す機会がありました。その声を聞いた所、FSPでの学びを生かして次のステップへと進んでいくFSP生が何人もいました。どのような過程を経てFSP生は成果を得たのか、この思いを伝えたいという気持ちで報告書の執筆と編集に携わることができました。そのことをとても嬉しく思います。

(伊藤愛沙子)

報告書を作成し改めて約2週間の海外研修、ひいてはFSP全体を通して学んだことの多さに気付かされました。FSPを文字通りファースト・ステップとして、この研修で学んだ勇気を持って挑戦することや人との関係を大切にすることなどを実行して、次のステップに繋がっていきたいです。この報告書から、FSPに少しでも興味を持っていただけたなら何よりです。

(岩佐凜佳)

今回研修で学んだことを実際に報告書にまとめる中で、研修中の出来事が鮮明によみがえってきました。改めて、このFSPに参加してとてもよかったと思っています。私はFSPに参加したことで、キャリアについてもっと柔軟に考えても良いということや、主体的に動くか動かないかで結果が非常に変わってくるということなど、これから生きていく中で多くの重要なことを学ぶことができました。今回の経験で学んだことを活かし、恐れずすぐに行動に移していきたいと強く思いました。

(小柏雛音)

明確な目標を持たずにFSPに応募したこともあり、初めは思うようにいかないことも多くありました。しかし、13日間の活動を通して仲間意識が生まれ、だんだんと精力的に活動できるようになりました。また、FSP生同士で普段ではなかなか話し合うことのできないような内容について話し合えたことで、さまざまな考え方を吸収できた上、視野を広げられたように感じます。この報告書を通して、FSPの魅力が読者に少しでも伝われば幸いです。

(中出祥太)



北海道大学

HOKKAIDO UNIVERSITY

【表紙写真】

上段左：SMUでの集合写真

上段右：IMCB様で御講話を聞き入るFSP生

中段左：自主研修先の一つ シンガポール マーライオン

中段右：MSU生に楽器を習うFSP生

下段：自主研修先の一つ マレーシア ペトロナスツインタワー

(表紙デザイン：松榮和也)

一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン2

通称 ファースト・ステップ・プログラム（FSP）

第32回FSPアジア 全体報告書：2023年3月24日（金）

【編集】

第32回FSPアジア グループ5 全体報告書編集担当

安倍 直哉 伊藤 愛沙子 岩佐 凜佳 小柏 雛音 中出 祥太

【お問い合わせ先】

北海道大学 学務部国際交流課

TEL：(011)706-8040

Email：ambitious@oia.hokudai.ac.jp

Website：『北大生のための留学ガイド』 https://www.oia.hokudai.ac.jp/be_global/